

## 人間回復の旅 一日双海人

ふたみんちゆう

最優秀賞

寺本 克彦

7月初旬、例年なら梅雨末期の大雨に見舞われるところだが、日ごろの行いか、椿さんの御利益か、私の小旅行を快晴の愛媛が迎えてくれた。

広島からの高速船はとても快適で、島々を眺めているうちに、あつというまの瀬戸内海横断となる。港が町の玄関というのも風情がある。

私にとっては、30年前、片思いの彼女に告白もできず、寂しく旅立ったセンチメンタルスポットである。港に恋あり、物語りありと、ひとり勝手に思いをはせながら観光港に上陸。待合室には、愛媛の友人が迎えに来てくれていた。

今日は、愛媛の若い仲間たちが、折角の休みをつぶして、おじさんの小旅行に付き合ってくれるのである。

彼女たちの本日の企画は、『一日双海人(フタミンチュウ)』伊予市双海町を満喫しようというものである。

夕日のまちづくりを少しは聞きかじっているが、どうせ道の駅の成功事例ぐらいだろうというのが正直なところ。その道の駅「ふたみシーサイド公園」で、本日の同行仲間が集合、総勢7名の大旅行となった。

道の駅の視察から始まるかと思いきや、7人を乗せたワゴン車は海岸沿いを南下、旧道に入って、少し登ったところにあったのは、夕日の駅『下灘駅』。

無人の駅のベンチに気持ちよさそうに寝ている青年を発見。なんと彼は8人目の同行者であった。ローカル線に乗ってやってきて、瀬戸内海を一望しながら、最高の昼寝をしていたのである。みんなで『下灘駅』のすばらしさを満喫させていただいたのはもちろんのこと、いろんな衣を脱ぎ捨てて、心を開ききっての仲間旅の始まりである。



▲下灘駅

8人になったワゴン車は、一路山間部へ、双海にこんな山間部があるとは驚きである。

着いたところは、翠小学校。愛媛で一番古い木造校舎をエコ整備した学校とのこと。二宮金次郎に迎えられ、校舎に入ると、まずはオープンな木の廊下。木造は、やっぱりこれ、雑巾がけの衝動にかられるのは、私だけではないはずである。有料雑巾がけ体験を提案しておいた。

木のぬくもりの中で学ぶことで、やさしい人間が育つという、すばらしい教育環境に

感激、そろそろ大きなお腹がすいてきた。

次の訪問先はピザ屋とのこと。こじやれた建物を予想していたが、着いたところはピニールハウスのど真ん中、なんと農家の皆さんが経営する石釜のピザ屋である。

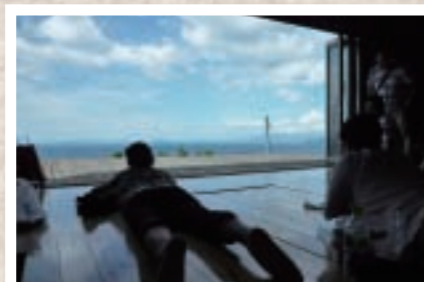
すぐに食べさせてくれるのかと思ったら、8人で別々のピザを作り、8種類の自作ピザを味わうことができた。素材やソースも全て自家製、味噌だれや夏野菜など、おじさんの舌にもピツタリ、農村ピザ体験、はまりそうで怖い。



▲ピザ体験

そのまま、近所のブルーベリー園へ行きデザートタイム。そこからワゴン車は山登り。海岸から延々と上り続け、山の斜面に農家が点在する集落を抜け、みかん畑の中をぐぐると、前面には、大きな大きな瀬戸内海、遠くの島まで一望できる絶好のロケーション。

するとそこには、五右衛門風呂の展望浴場や研修棟。そう、ここは地域づくりの人材育成の場『人間牧場』。瀬戸内海へ張り出す大きなウッドデッキに寝そべり、自然の壮大さを感じながら、さまざまな学びを行う場なのである。大自然の中で頭を空っぽにし、愛媛の友人たちと熱く語り合うことができた。



▲人間牧場

下灘駅で心を開き、木造校舎で感じ、農村ピザを味わい、人間牧場で学んだ。

日ごろの俗世を忘れ、人間らしく感じ、人間らしく学ぶことにより、気持ちがどんどん優しくなっていくのが、自分でもはつきりと感じることができた。

やさしくて大きい自然、そしてやさしい仲間たちという愛媛のお宝に抱かれ、私の小旅行は、やさしくなれる旅 - 人間回復 - の旅となったのである。

解散の前に、浜辺で皆で食べたジャコ天の味、愛媛の優しさの味として、私の心にいつまでも残るだろう。私の宝物 愛媛の仲間たちに感謝し、私の旅行記をお開きとする。

## その時、あらしに出会った。

優秀賞

三宅 康裕

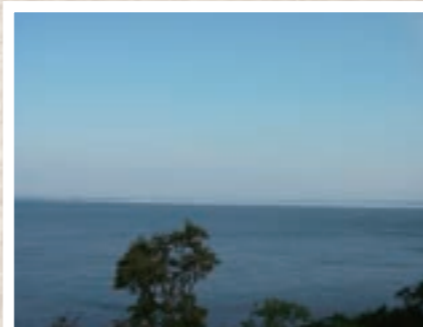
その年の私には、月に一度の楽しみができた。愛媛県八幡浜市への出張だ。

岡山から瀬戸大橋を渡り松山自動車道を大洲ICまで、そして大洲道路から国道197号を経て八幡浜まで車を走らせる。

そこは、九州への船の玄関、みなとまち。海の香りがするこの町の名物といえば「ちゃんぼん」だ。普段頭に思い浮かぶちゃんぼんといえば、長崎の白い豚骨スープだが、ここ八幡浜はちょっと違う。魚介類がベースなのだ。そして、具にはもうひとつの名物じゃこてんが盛りされていて、海と魚のまちらしさが漂う。市内にある数十店舗のなかから毎回新しい店を訪ねてまわる。海産物にたっぷりのキャベツなどさまざまな具材、スープの濃厚さ、無骨さ、繊細さ、訪れる店ごとに個性が際立ち新しい発見がある。それが仕事の合間のとっておきの楽しみ。好みの味に出会ったときはとても得した気分になり、仕事もはかどる。疲れた体を癒してくれる旅館では、八幡浜港から水揚げされた新鮮な魚が普段の夕食で味わえる。八幡浜までの道のりは岡山からは決して近くはないが、いつも喜んで出かけていたのはそんな理由があったからなのだ。

これだけ書くと私がうまいもの目当てで、あたかも鼻先になんじんを吊るされた馬のように走っていたように思えるかもしれないが、実はそれだけではない。

高速道路から見える燧灘や伊予灘の瀬戸内らしい穏やかな眺め、そして、四国最高峰石鎚山に代表されるダイナミックな景色も魅力だ。



▲伊予灘①

そんな愛媛の自然が、何も考えず、ただ最短ルートを走っていた私の気持ちを誘惑した。八幡浜通いも半年を過ぎたその日、出発が遅れ、伊予市に差し掛かるころには夕日も傾きかけていた。夕日、ん、そう言えば、このまま伊予ICを降りれば国道378号夕やけこやけラインじゃないか! そう思うや否やハンドルを左に切り高速を降りた。銭尾峠を下り、まもなく海岸線を走るところ、日本一とも言われる水平線に沈む夕日が迎えてくれた。オレンジ色に染まる水平線を眺めながら思わず息をのむ。ただこの道の良さは夕日だけではない。美しい海岸線と伊予灘、その中に浮かぶ島々。気持ちよい直線

と、ときより現れる適度なワインディング。そして、点在する港町の風景。まさにドライブにもってこいのルートだ。当然、時間を比べれば高速道路にはかなわないのだが、それも数十分のこと、この気持ち良さどちらを取るか。答えるまでもない。それからは、余程急ぎの用がない限りこのルートを走ることにした。

それは、一年間の八幡浜通いの最後の出張となった冬の日のこと。私は、最後の一仕事終えて、なじみの宿に一泊、翌朝、八幡浜に別れを告げいつものように車を走らせた。保内町から磯崎トンネルを抜け海に出る。冬の冷たい澄んだ空気の中、海岸沿いを走り抜け大洲市長浜町に入る。そして、犀の鼻に差し掛かったときだ。前方に広がる伊予灘の様子がおかしい。よく見れば海岸から噴出す白い煙の塊。なんじゃあは?! その不思議な光景に思わず声が出た。次の瞬間、はっと気が付く、大洲嵐だ! 脇川の中流大洲盆地で作られた霧が、脇川の流れに沿って海まで流れ出すという、白龍の流れ。車を止め、シャッターを切る。再び車を走らせ脇川の河口に近づいた。川面を流れる霧はまさに嵐だ。海上をよく見れば数人のウィンドサーファー。この荒々しい自然を待ってましたとばかりに楽しんでる。お前も楽しめよ。嵐の音がそんな風に聞こえる。愛媛の自然は、一年間の旅の終わりにとっておきのご褒美をプレゼントしてくれたようだ。



▲長浜大橋(日本最古の開閉橋)を望む



▲伊予灘②

## 銀天街で暮らしたい

優秀賞

山世 孝幸

愛媛県に住むなら、松山市の銀天街近くに限る。出張で北海道から松山を訪れた際、銀天街やその周辺を歩いて、心からそう思った。松山市の中心部にもかかわらず、大都市にありがちな画一性に飲み込まれず、市民生活に密着した街の雰囲気があったからだ。

「市民生活に密着」、と漢字で書くより、「松山の人たちの暮らしそのもの」と書いたほうがしっくり来る。銀天街は、人々の息づかいが伝わってくる温もりがある。

銀天街では、全国展開のチェーン店を凌ぐ地元商店の活気が強く印象に残った。

オリジナルの手帳やカレンダーなど魅力的な商品を販売している雑貨屋、昼を過ぎると調理パンが半額になるベーカリー、昔風の店構えで営業する甘味処。魅力的な店ばかりだ。書店やショッピングセンターもある。

そこに行けば普段の暮らしに必要な物はだいたい揃う。勤め帰りに銀天街に立ち寄って、買い物をしたりお茶を飲んだりするような暮らしをしたい。



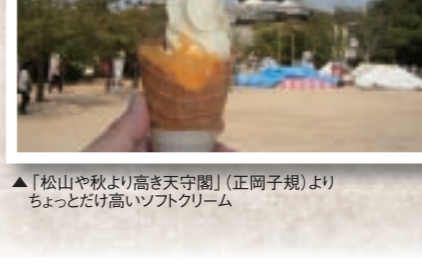
▲銀天街の雑貨屋さん

銀天街を抜けると、松山市駅前が出る。そこから北に向かうと松山城を見上げる城山公園に至る。とても広い公園で、周囲の空間が急に拡がったように驚かされた。

よく、北海道は広いと言われる。しかし城山公園で経験したような広さの感じ方をするにはあまりない。北海道の風景の広さは原野に放り出されて味わう広さだ。城山公園の広さは、街中にあって街を離れたような気分させられる。広大な空間をぼつこりと切り取ったようだ。

休日には、ここに来れば身も心も伸び伸びとくつろいで、仕事の疲れもストレスも吹き飛ばす。仕事で銀天街のどこかに、小さな喫茶店を開き、訪れてくれる人をくつろがせる場所にしたい。それではまた、銀天街に魅せられる人を増やしたい。

松山の銀天街で、そういう思いがふつふつと沸いてきた。昔から物成りがよく、穏やかな伊予人気質を感じたからに違いない。



▲「松山や秋より高き天守閣」(正岡子規)より  
ちょっとだけ高いソフトクリーム



▲城山公園の風景

松山市の魅力は銀天街と城山公園だけではなく、道後温泉にもある。市電に乗って行ける温泉、というのが面白い。

札幌の市電は市内のごく一部を半周するだけだが、松山では市電が公共交通機関の主役である。その市電で行ける温泉は、市民にも、たいそう身近な存在なのだろう。

銀天街近くに住み、仕事が終わってから時には、市電に乗って道後温泉に入りに行く。まるで夏目漱石の「坊っちゃん」そのものの暮らしだ。あれは松山への単身赴任のモデルケースみたいなものかもしれない。

松山市内のあちこちにベンチがあったのも印象的だ。札幌にもベンチくらいあるが、松山には特に多い感じがした。冬が長い札幌では、外のベンチに座ってられる時期はごく短い。温暖な気候の松山では、通年でもベンチで一服することができるだろう。おっとりした気質の伊予人は、隣り合った人と挨拶をしたり気軽に世間話をしているようだ。

松山に住んだら、そういう風にベンチを使いたい。買い物や仕事の合間に、ちょっと腰掛けて一息入れたり、隣の人にちょっとした挨拶や会話ができるような暮らしにとけこみたい。

このように松山市の銀天街近くで暮らせば、穏やかで寛いだ生き方ができそうだ。

今はまだ、例えば転勤や単身赴任で、という形で暮らすことしか思い浮かばない。勤め人の想像力の限界、というものだろうか? そこで暮らしていくうちには、もっと街に根付いた生き方や働き方が見つかる気がする。

できたら銀天街のどこかに、小さな喫茶店を開き、訪れてくれる人をくつろがせる場所にしたい。それではまた、銀天街に魅せられる人を増やしたい。

松山の銀天街で、そういう思いがふつふつと沸いてきた。昔から物成りがよく、穏やかな伊予人気質を感じたからに違いない。